

# 沖縄島北部の原木シイタケ経営について

沖縄県森林資源研究センター 町田 誠司

A report of management of shiitake mushroom log cultivation in northern part of Okinawa island

Seiji MACHIDA (Okinawa Prefectural Forest Resources Research Center)

## 1. はじめに

沖縄島北部の農林家にとっては、原木栽培のシイタケ生産は安定した収入源の1つとなっている。また、近年、食への安全性の高まりから、農薬を用いないイタジイ原木栽培のシイタケの需要は拡大傾向にある。ところが、生産者を見ると、生産規模、生産体制、生産手法及び販売単価は従来とほとんど変わっていないが、光熱費、資材費をはじめとする生産コストは上昇傾向が続いている。

このように需要がありながら生産体制を踏まえ、沖縄島北部の原木シイタケ生産者について、経営の実態を明らかにして、今後の経営改善及び経営指標作成の基礎資料を得ることを目的に実態調査を行ったので、その結果を報告する。

## 2. 調査の方法

調査は、経営類型の異なる3生産者について行い、調査対象期間はホダ木1代の使用が終わる1年半(2005年1月から翌2006年6月まで)とした。調査の方法は、調査票及び現場聴取により、生産量、労働量及び各種経費等について行った。

## 3. 結果と考察

調査を行った生産者の経営類型とその経営規模を表-1に示す。その内訳は専業が1者(以下A者)、兼業が2者で、兼業はさらにホダ木の本数により「シイタケ経営が主」(以下B者)と「シイタケ経営が副」(以下C者)の2つに分類した。

栽培環境は、専業とシイタケ主が人工ホダ場、シイタケ副が林内ホダ場であった。労働力は3者とも家族労働が基本であった。また、生産者は高齢化が進んでおり、年齢は51~65歳であった。

経営規模は専業が植菌ホダ木数7,000本、兼業がそれぞれ4,800本と2,850本であった。

表-1 調査したシイタケ生産者の経営タイプと経営規模

| 経営類型 | 経営規模(本) | 労働力 |
|------|---------|-----|
| A者   | 7,000   | 家族  |
| B者   | 4,800   | 家族  |
| C者   | 2,850   | 家族  |

経営状況を表-2に示す。労働時間、種菌費等経営費は概ねホダ木本数に相応しA者が最も多かった。但し、種菌費には補助があった。また、原木の調達方法は、A者とC者が伐採による自給であったのに対し、B者は3,300本を1本当たり100円で購入し、残りは伐採により自給していた。原木代については自給に要する経費を労賃に換算して求めた。

表-2 調査した3生産者の経営状況

|                                       | A者        | B者        | C者        |
|---------------------------------------|-----------|-----------|-----------|
| 経営規模(本)                               | 7,000     | 4,800     | 2,850     |
| 生産量(kg)                               | 2,550     | 1,485     | 849       |
| 労働時間(時間)                              | 2,925     | 1,137     | 633       |
| 経営費(円)                                |           |           |           |
| 種菌費                                   | 510,900   | 321,900   | 111,325   |
| 原木代                                   | 323,000   | 362,340   | 258,720   |
| 諸材料費                                  | 71,400    | 29,700    | 16,980    |
| 光熱動力費                                 | 263,000   | 106,509   | 22,262    |
| 修繕費                                   | 300,000   | 30,000    | 20,000    |
| 償却費                                   | 0         | 149,310   | 0         |
| 雇用労賃                                  | 92,400    | 136,290   | 129,360   |
| 流通経費                                  | 35,880    | 4,160     | 26,000    |
| 生産物収益(生産量×単価)                         | 3,825,000 | 2,227,500 | 1,273,500 |
| 経営費                                   | 1,596,580 | 1,140,209 | 584,647   |
| 粗収益(生産物収益-経営費)                        | 2,228,420 | 1,087,291 | 688,853   |
| 1日当たり家族労働報酬<br>(粗収益/労働時間/8時間労働<br>/日) | 6,095     | 7,650     | 8,706     |

諸材料費は包装費等、光熱動力費は電気、燃料及び水道費、修繕費は人工ホダ場の遮光ネットの張替え等施設の修繕費であった。生産者の施設の状況を図-1~3に示す。償却費は、施設については耐用年数を過ぎていたため費用の発生はなかったが、B者のみ最近購入分の軽トラックとポンプについて発生した。雇用労賃は、植菌作業に要していた。流通経費は出荷にかかる経費で生産物の運賃当である。

生産物収益は1,500円/kgで算出した。粗収益はA者が最も多かったが、1日当たり家族労働報酬はC者が多かった。

ホダ木1本当たりの労働投入量(労働時間/経営規模)を図-4に示す。専業は労働投入量が最も高かった。このため、A者については、労働投入量の軽減が経営改善に重要と考えられた。



図-1 A者の施設（発生舎）



図-2 A者の施設（人工ホダ場）



図-3 C者の施設（林内ホダ場）

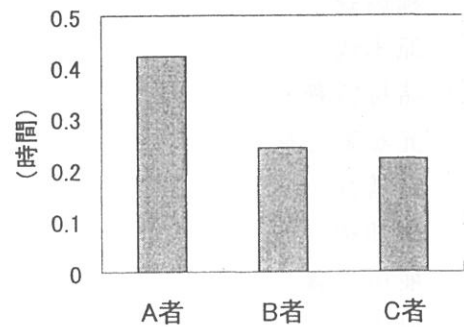


図-4 ホダ木1本当たりの労働投入量

作業別の労働時間に占める割合を表-3に示す。植菌、浸水、収穫・袋詰め作業に多くの労働が投入されていた。

表-3 作業別の労働時間の割合

|        | A者    | B者    | C者   |
|--------|-------|-------|------|
|        |       |       | (%)  |
| 植菌     | 8.2   | 11.9  | 21.0 |
| 伏せ込み   | 1.9   | 2.8   | 1.5  |
| 管理     | 6.2   | 6.8   | 3.2  |
| 積み替え   | 7.7   | 2.8   | 4.0  |
| 散水     | 0.0   | 6.8   | 0.0  |
| 浸水     | 21.2  | 25.3  | 32.8 |
| 収穫・袋詰め | 49.5  | 42.2  | 25.0 |
| 出荷     | 5.3   | 1.4   | 12.5 |
|        |       |       | (時間) |
| 労働時間   | 2,925 | 1,137 | 633  |

損益分岐点を表－４に示す。特にＡ者は、売上高が損益分岐点売上高にほぼ等しく経営の厳しさがうかがえる。Ｂ者とＣ者についても損益分岐点に近く収益性がよいとはいえない状況である。また、参考のため「2006年度版きのこ年鑑」の生シイタケ経営指標<sup>1)</sup>の値を用いて見てみると、生産量に占める損益分岐点生産量の割合が28%であることから、収益性は高くなかった。

ホダ木1本当たりの損益の目安は、Ａ者で367g、Ｂ者とＣ者で228～266gであった。

表－４ 損益分岐点

|                               | A者        | B者        | C者        |
|-------------------------------|-----------|-----------|-----------|
|                               |           |           | (円)       |
| 売上高(生産物収益)                    | 3,825,000 | 2,227,500 | 1,273,500 |
| 損益分岐点売上高                      | 3,856,607 | 1,914,934 | 975,365   |
|                               |           |           | (g)       |
| ホダ木1本当たり生産量(a)                | 364       | 309       | 298       |
| ホダ木1本当たり損益分岐点生産量(b)           | 367       | 266       | 228       |
|                               |           |           | (%)       |
| 生産量に占める損益分岐点生産量の割合<br>(b)/(a) | 101       | 86        | 77        |

※費用に家族労賃含む

#### 4. まとめ

粗収益は、扱うホダ木数が多い専業が多かったが労働投入量も多かったことから、経営を改善するためには、作業量を軽減する工夫が必要である。

作業別労働時間の割合を見てみると、植菌、浸水、収穫・袋詰めに多くの労力を要していることから、これらの改善が最も効果的であると考えられる。

また、損益分岐点収支から、本県のシイタケ経営の収益性がよいとはいえない実態が明らかとなった。

調査の課題としては、今回は主に調査票と聞き取りによるため、精度を高めるためには、現場の実測も行い、数回は調査する必要がある。

#### 引用文献

- 1) 竹内嘉江 生シイタケ経営指標「2006年度版きのこ年鑑」